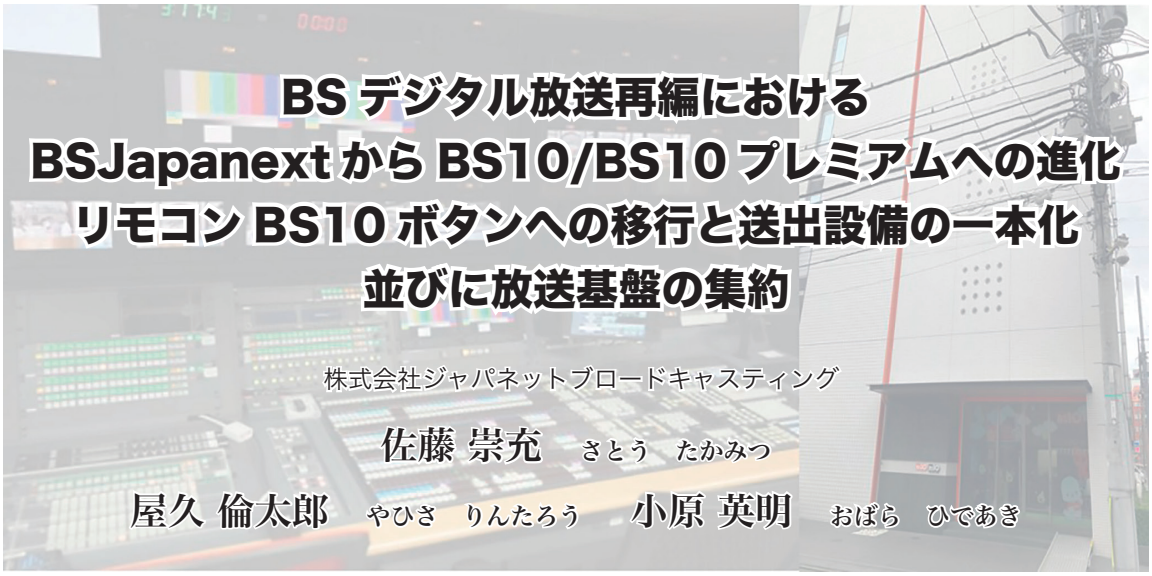
特集

BS 帯域再編における
ジャパネットブロードキャスティングの戦略

BS デジタル放送再編における BSJapanext から BS10/BS10 プレミアムへの進化
リモコン BS10 ボタンへの移行と送出設備の一本化並びに放送基盤の集約



BS デジタル放送再編における BSJapanext から BS10/BS10 プレミアムへの進化 リモコン BS10 ボタンへの移行と送出設備の一本化 並びに放送基盤の集約

株式会社ジャパネットブロードキャスティング

佐藤 崇充　さとう　たかみつ

屋久 倫太郎　やひさ　りんたろう　小原 英明　おばら　ひであき

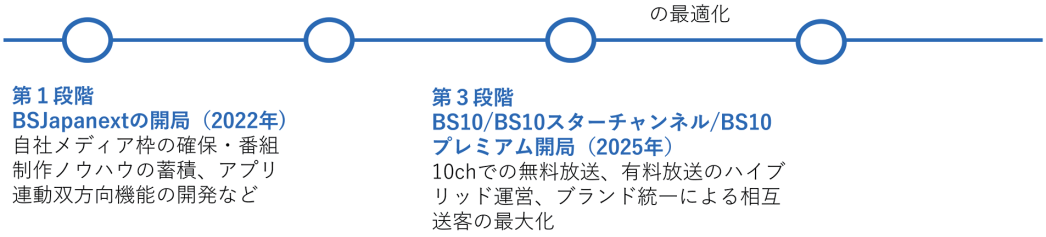


図1　再編プロセス

1. はじめに

日本の衛星放送（BSデジタル放送）市場は、地上波の補完的役割から多様な専門コンテンツの提供、4K/8K放送の普及に至るまで、メディア環境の変遷とともに、その姿を変えてきた。近年では、定額動画配信サービス（SVOD）の急速な台頭、テレビ視聴習慣の変化、さらには主要広告主の市場構造の変化を受けて、無料放送・有料放送を問わずメディアビジネスとしての抜本的な再構築が急務となっている。

こうした衛星放送市場の激変期において、ダイナミックかつ合理的な成長戦略を展開したのが、通信販売で知られるジャパネットグループでBS放送事業を行うジャパネットブロードキャスティングである。

ジャパネットブロードキャスティングは2022年「BSJapanext」を開局した。ジャパネットには通販事業に加え、サッカーやバスケのプロスポーツチーム、クルーズ事業、長崎スタジアムシティでの音楽イベントなど、自分達の手でコンテンツを持つ。自分達で「見つけ」「磨き」、それを全国の皆様に「伝える」ことが事業方針であり強みである。これらの事業経験や、働き方も含めた当社の強みを活かし、既存の考えや慣習にとらわれない新たなチャレンジを進めていくというのがBS放送事業参入への大前提となる。この開局を皮切りに2024年歴史ある有料映画専門チャンネル「スターチャンネル」をM&A、そして2025年1月の新BS放送局「BS10（ビーエステン）」及び「BS10（ビーエステン）スターチャンネル」へとリニューアルし、衛星放送史上初となる同じ10ボタンポジションでの無料放送／有料放送のハイブリッド運営をスタート。

さらに、スターチャンネルを従来の洋画に加えて、邦画や音楽コンテンツを充実させ「BS10（ビーエステン）プレミアム」へと進化。そしてスカパーJSATの基盤を活用した送出設備の一本化（集約）に至るまで、過密かつ緻密な構造改革を進めた。

おばら　ひであき：株式会社ジャパネットブロードキャスティング　制作サポート・技術部シニアリーダー

本稿では、ジャパネットブロードキャスティグの一連の動向を軸とし、「BSJapanextの開局」「スターチャンネルのM&A」「BS10及びBS10スターチャンネルへのリニューアル及びBS10プレミアムへの再編・展開」「スカパーJSATのインフラを活用した送出設備の一本化とバックエンド効率化」という4つの要素に着目し、その概要を説明する。

2. BSJapanextの開局：自社チャンネルの獲得と初期の構造的課題

■新規BS放送局開局とジャパネットブロードキャスティングの戦略目的

2022年3月、総務省によるBSデジタル放送帯域（HD）の割り当てに伴い、新規参入事業者の一社として「BSJapanext（263ch）」が開局した。

ジャパネットグループは元来、地上放送や既存BS、CS局の枠を購入して「ジャパネットたかた」のテレビショッピングを放映するインフォマーシャル事業者であるが、テレビショッピングを主目的に開局したわけではない。世の中に埋もれた素晴らしい商品・サービス・情報・エンターテインメント・考え方を選び抜いて紹介し、あらゆる素晴らしいものを「つなぎ」、生活の変化を通して「ワクワク」を広げていくチャンネルになることを目指し「メディアプラットフォームの自社化」へ舵を切る。

しかし、新設の帯域であるBS263chは、既存のテレビリモコンに配置されたワンタッチボタン（1～12ch）に割り当てられてはおらず、電子番組表（EPG）からの選択や3桁番号入力による選局が必要であった。

このチャンネルポジションは広範な視聴者層（特に高齢層以外の新規層）を獲得する上で大きな課題となり、良質なコンテンツを制作しながらリーチを爆発的に拡大することは構造的な限界を超えていた。

3. スターチャンネルのM＆A：コンテンツ資産と10ボタンの獲得

■M&Aの背景と双方の戦略的合致

2024年4月、ジャパネットブロードキャスティングは、株式会社東北新社が所有していた株式会社スター・チャンネルの全株式を取得し、完全子会社化することを発表した（同6月に株式譲渡完了、同8月吸収合併）。

今回のM&Aは、以下のシナジーを見出す機会であった。

・歴史あるプレミアムコンテンツの調達ルートの獲得

1986年の創立以来、海外メガスタジオとの強固なリレーションとハリウッド映画、海外ドラマの豊富な調達実績を持つスターチャンネルをグループ会社化することで、コンテンツ制作・調達能力を一気に底上げすることとなった。

・チャンネルポジションの獲得と、有料／無料のハイブリッド運営による相互送客

スターチャンネルは、既存のBSリモコンの「10」ボタンに紐づくBS10ch（BS200ch）で放送を行っていた。最大の課題であった「チャンネルの視認性の向上」を達成できることを意味している。

また、有料放送／無料放送のハイブリッド運営による相互送客という、新たな市場開拓の機会にもなった。

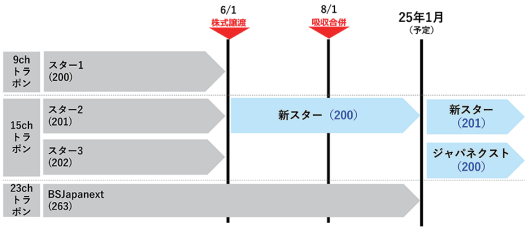


図2　手続きと変更スケジュール

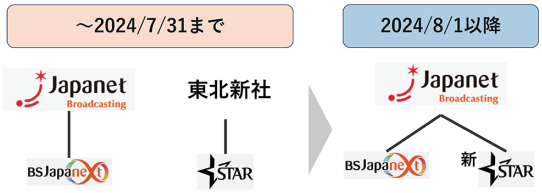


図3　実現に向けて進めたこと

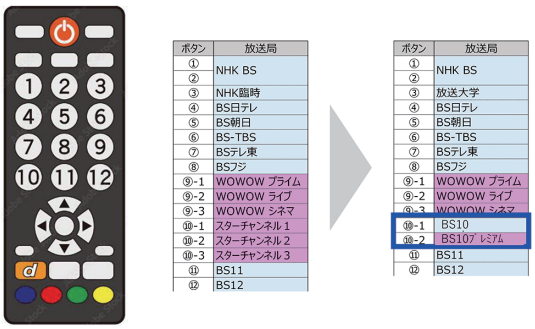


図4　今後のリモコン環境

4.「BS10」へのチャンネル移行は全て自前で行う必要があった

263ch（新設帯域）から200ch（旧スターチャンネルの帯域）へ移行し、「BS10」へのリニューアルにあたり、「なぜ自社（ジャパネットブロードキャスティング）

主導で全て動かなければならなかったのか」という背景について説明する。

結論からいうと、これはM&Aなど異例のチャンネル番号変更を想定したルールが放送業界や既存プラットフォームに存在せず、前例のないプロジェクトだったためである。

■総務省やプラットフォーム主導の移行ではなかった

通常、放送局のチャンネル番号変更や帯域再編は、総務省の管轄のもとで放送業界全体（または放送プラットフォーム主導）の計画に基づいて行われる。

しかし、今回の263chから200chへの移行は、行政指導やプラットフォーム主導の再編ではなく、ジャパネットブロードキャスティングが「263chではリモコンのワンタッチボタン（1ch～12ch）」に届かず、視聴者が辿り着きづらいという構造的弱点を克服するために自ら行った経営戦略であり、国や他社が用意した移行計画ではないため、移行に必要な全ての折衝、設計、調整を自前で動かして主導・解決するしかなかった。

表1　申請手続きと技術課題手続きの手配

総務省	スターチャンネル承継
	帯域変更
	BSJapanext認定更新
	有料放送約款変更
A－PAB ARIB JEITA	サービスＩＤ変更
受信機メーカー 日本ケーブルテレビ連盟 日本ケーブルラボ ケーブルテレビ事業者	帯域及びサービスＩＤを変更しても問題ないか、 テストストリームを配布し検証
当放ベンダー B－SAT プラットフォーム事業者	史上初の別プラットフォームからの送出で番組表が正しく表示できるのか。 データが混在する可能性は。

■総務省への認定変更申請

BS放送の帯域運用や番組属性（無料放送か有料放送か）は、総務省の厳格な認定（許認可）に基づいている。「BS15chトラポン（帯域）の中に、M&Aによる承継を経て無料放送を入れる」という史上初の運用を実現するため、自社で行政との技術的・法的な詰めの調整を全面的に行った。

■論理チャンネル（Service ID）及びスロット（帯域）の再配置

旧BSJapanext（BS 23ch/TS-01）と旧スターチャンネル（BS15ch/TS-02）のトランスポンダ及びサービスIDは全く異なるところにあり、これを、10ch（BS200ch）に集約・整理させる必要があった。

NIT（Network Information Table）、PAT（Program Association Table）、PMT（Program Map Table）を全面的に刷新。リモコン「10」キー入力時に、優先的に無料主サービスBS200chのPMTへルーティングし、チャンネル選局（プラスボタン操作）時に有料チャンネルBS201chのPMTにシームレスに切り替わる導線とした。

表2　帯域移動前後のトランスポンダの状況

	15chトラポン			23chトラポン			
24年12月	NHK	スターチャンネル2	スターチャンネル3	ディズニー	BS Japanext	よしもと	松竹東急
25年1月	NHK	新スターチャンネル	BS Japanext	ディズニー	よしもと	松竹東急	-

表3　トランスポンダとサービスIDの環境整理

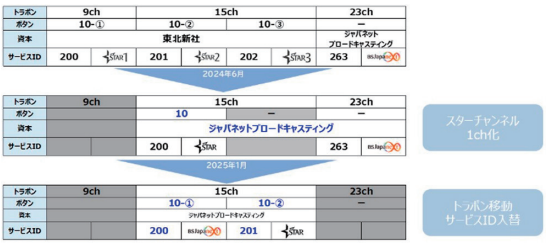


表4　パラメータの変更概要

（2024年11月現在）

チャンネル名	チャンネル番号（サービスID）	トラポン	TSID	ブロードキャスタID
BSJapanext	263	23ch	4972	0x19
スターチャンネル	200	15ch	40F2	0x08
スターチャンネル（データ放送）	800	15ch	40F2	0x08

（2025年1月10日以降）

チャンネル名	チャンネル番号（サービスID）	トラポン	TSID	ブロードキャスタID
BS10	200	15ch	48F3	0x08
BS10スターチャンネル	201	15ch	40F2	0x08
BS10スターチャンネル（データ放送）	800	15ch	40F2	0x08

■ケーブルテレビ再放送における技術的・運用的課題

日本ケーブルテレビ連盟（JCTA）、日本ケーブルラボ（JLabs）を通じた早期技術情報の開示

ケーブル事業の業界団体でもある日本ケーブルテレビ連盟（JCTA）、日本ケーブルラボ（JLabs）、主要CATV（J:COM）に対し、移行計画を早い段階から技術仕様を開示し、ヘッドエンドベンダーへのテストストリーム検証への協力依頼を要請した。

PSI/SIパラメータの事前開示

200ch枠（Service ID：200）における無料放送（BS10）と有料放送（BS10スターチャンネル）の多重化構造（PMT/SDT）の技術仕様を事前に共有。

ヘッドエンド機器設定変更のリードタイムの確保。

事業者での改修・テスト期間を考慮し、2025年1月の本移行に先立ち準備期間を設け、設定変更の協力を要請した。

表5　ケーブルTV事業者への手配状況

【ジャパネットブロードキャスティング】

→①法務・契約：全国ＣＡＴＶ事業者への「BS10再放送同意」、申請手続きの一括Ｗｅｂ化、周知

→②技術・運用：日本ケーブルテレビ連盟／日本ケーブルラボ
ヘッドエンドメーカーとの技術的調整
トラモジ設定変更、ＳＴＢ用ＳＩ／ＥＰＧデータの切り替え仕様設定

→③広報・カスタマー支援：ＣＡＴＶ加入者向け告知（チラシ、番組案内）の無償提供
「リモコン１０を押すだけ」という明確なガイダンスの浸透

表6　解決プロセスがもたらした成果

No.	課題項目	従来の課題	当社の主導的解決策
1	契約手続き	全国数百社との契約（遅延リスク）	Ｗｅｂフォームによる一括再放送同意、デジタル受付の確立
2	ＳＴＢ／ヘッドエンド	263chの停波に伴うＳＴＢ側の選局ブラックアウト	日本ケーブルテレビ連盟、日本ケーブルラボ連携による事前のSI仕様開示とトラモジ設定の同時一斉変更
3	視聴者混乱	ＣＡＴＶ加入者からの問い合わせによるサポートパンク	ＣＡＴＶ事業者向け共通広報素材（チラシ、マニュアル）の無償提供

約2ヵ月間に渡り、テストストリームの検証にご協力頂いた受信機メーカー、ヘッドエンドメーカ約23社より「異常なし」との回答を頂く。

表7　ストリーム検証結果

（単位：社）

テストストリーム検証	※6/18～8/19検証	内訳 受信機	内訳 STB/HE
良好	23社様	16	7
確認中	0社	0	0
問題あり	0社	0	0

5. 検証後に発覚したブロードキャスタIDの課題

ブロードキャスタIDが同一かつ別々のEPGサーバからBITを送出すると「SI集配信センター」で上書きされることが分かった。

＜前提＞

BSJapanextは、スカパーJSAT（東陽町）から、スターチャンネルは旧スターチャンネル送出元からそれぞれ送出を行っている。

＜課題＞

BIT送出もそれぞれのEPGサーバから行っているが、B-SATのSI集配信センターでは、ブロードキャスタIDが同じ場合、新たに届いたブロードキャスタIDで上書きされることが判明する。

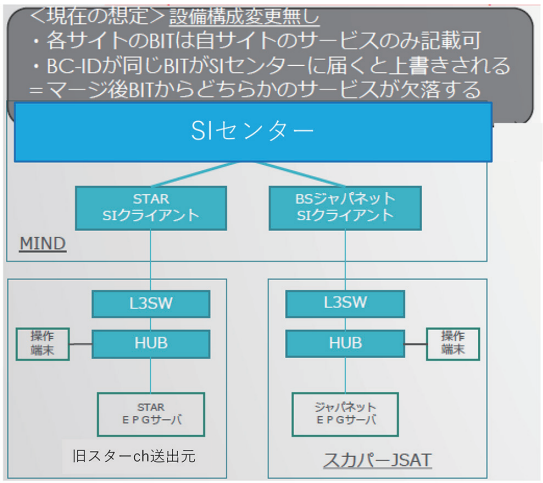


図5　検証後発覚したブロードキャスタIDの課題

＜解決策＞

旧スターチャンネル送出元の旧スターチャンネル2のEPGサーバを復活させ、新川営放システム端末からはBSJapanextのEPGを入力してBITを送信、スカパーJSATより全局SI集配信に送信しなければ対応が可能であることが判明する。

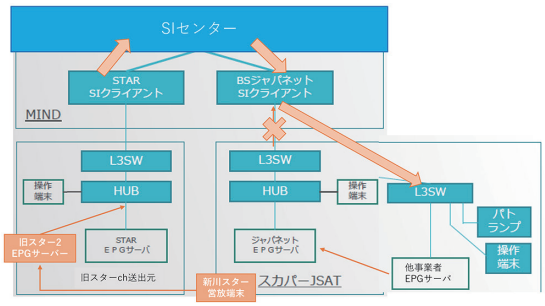


図6　解決方法

①BSJapanextでスカパーEPG端末でのデータ入力は継続。

②BSJapanextはスターチャンネル営放システムを使用し、BSJapanextのEPGを作成、旧スターチャンネル送出元から全局SI集配信へBSJapanextのSI情報（other）を送信する。

③スカパーJSATでは、BSJapanextのSI情報を全局SI集配信には送信しない。

④スカパーJSATはEPG端末へ入力された情報を元に自局(BSJapanext)で必要なSI情報を生成し、他のTS信号（映像・音声等）を多重化し、B-SATへ伝送する。

機器の設定変更・改修も必要となり、リニューアルに間に合わないのではないかと思われたが、シン・プラットプレイアウト及び各社のご協力により最難関を乗り切ることができた。

■切り替え前のEPG挙動

2025年1月10日切替のため、2025年1月3日より1月10日以降のEPG情報が表示されなくなり、録画予約ができなくなった。このため、視聴者の皆様には、1月10日午前4時以降に自動録画などの再設定をして頂くよう周知・広報活動を展開した。

表8　2025/1/3より1/10以降のEPG非表示

※ご参考）2024年12月31日以降の録画予約可能な日付（及びEPG表示される日付）

	12/31	1/1	1/2	1/3	1/4	1/5	1/6	1/7	1/8	1/9	1/10	1/11	1/12	1/13	1/14	1/15	1/16	1/17	1/18	1/19
2024年12月31日 録画予約・EPG表示できる日	○	○	○	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2025年1月1日 録画予約・EPG表示できる日	-	○	○	○	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1月2日 録画予約・EPG表示できる日	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1月3日 録画予約・EPG表示できる日	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	×	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1月4日 録画予約・EPG表示できる日	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	×	×	-	-	-	-	-	-	-	-
1月5日 録画予約・EPG表示できる日	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	×	×	×	-	-	-	-	-	-	-
1月6日 録画予約・EPG表示できる日	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	×	×	×	×	-	-	-	-	-	-
1月7日 録画予約・EPG表示できる日	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	×	×	×	×	×	-	-	-	-	-
1月8日 録画予約・EPG表示できる日	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	×	×	×	×	×	×	-	-	-	-
1月9日 録画予約・EPG表示できる日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	×	×	×	×	×	×	×	-	-	-
1月10日 録画予約・EPG表示できる日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	△	△	△	△	△	△	△	△	-	-
1月11日 録画予約・EPG表示できる日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	-
1月12日 録画予約・EPG表示できる日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○

6. BS10の開局：史上初の無料・有料ハイブリッドチャンネルの誕生

2025年1月10日「BSJapanext」と「スターチャンネル」を再編し、新BS放送局「BS10」「BS10スターチャンネル」を開局させた。

BS10の最大の革新は、同一のボタンポジション（BS10ch）において無料放送と有料放送をシームレスに同居させる「ハイブリッド運営」を衛星放送史上初めて実現した点にある。

視聴者がリモコンの「10」ボタンを押すと、まずは無料放送の「BS10」が映る。有料放送の契約者は、そこから選局ボタンの「＋」を押すか、番組表を選択することで、同ポジション内の有料ゾーン「BS10スターチャンネル」に切り替わる構造である。

・編成上のシナジー

この再編により、無料放送「BS10」の圧倒的なアプローチ力（地デジ感覚で視聴可能なBS 10chの位置）を活かして番組内で「BS10スターチャンネル」の映画やドラマの魅力をPRし、無料から有料へのシームレスな移行を促す導線を確立した。

また、ジャパネットグループは、サッカーやバスケ、麻雀のプロチーム、クルーズ事業、長崎スタジアムシティでの音楽イベントなどを保有・開催しており、これらを活用した自社コンテンツ化による視聴者を拡大する体制が整った。

表9　放送休止時間及び設定変更作業

放送局	放送休止時刻	放送開始時刻	休止時間	設定変更
ＮＨＫ	0:45	4:30	3時間45分	設定変更なし
スターチャンネル	23:45	9:00	9時間15分	サービスＩＤ:200→201（チャンネル名：BS10スターチャンネル）
BSJapanext	0:00	15:30	15時間30分	サービスＩＤ:263→200、トラポン：23ch→15ch　TSID：4972→48F3

「作業スケジュール」
2025年1月10日（金）
0:45～　　NHK放送終了
0:45～3:00　SI集配信システム・B-SAT本線設定変更
3:00～　　新NIT更新
4:00～　　試験電波発射（ムービングCB/1KHz）
4:30～　　NHK放送開始
9:00～　　BS10スターチャンネル放送開始
15:30～　　BS10放送開始



写真1　2025年1月9日　23:40:00～
スターチャンネル最後のエンディングID



写真2　2025/1/10 午前4時～BS10試験電波発射

表10　2025/1/9～10 の作業スケジュール

			1/9（木）	1/10（金）															
			23:00	0:00	1:00	2:00	3:00	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10：00～14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
放送	NHK様		番組放送	0:45 放送休止				4：30 番組放送											
	スターチャンネル▼BS10スターチャンネル	EPG	映画タイトル	23:45 放送休止									9:00 映画タイトル						
		オンエア	番組放送	B-SATへの信号断				CB/1kHz→作業完了後、「試験電波発射中」テロップ表示開始			番宣・フィラー		番組放送						
	BSJapanext▼BS10	EPG	番組タイトル	24:00 放送休止									PR文言「本日19時開局！BS10」	15:30 番組タイトル	PR文言			番組タイトル	
		オンエア	番組放送	B-SATへの信号断				CB/1kHz→作業完了後、「試験電波発射中」テロップ表示開始			（カウントダウン）番宣・フィラー			※記者会見中継	番宣・フィラー			番組放送※特番生放送	
作業	B-SAT様		SI集配信/本線/統合監視設定変更・改修		新NIT配信→NIT自動更新			BS15ch電波発射											
	スターチャンネル/東北新社様		ENC/MUX、疑似同期化装置設定変更作業					「試験電波発射中」テロップ送出			設定変更完了								
	BSJapanext/スカパー様																		

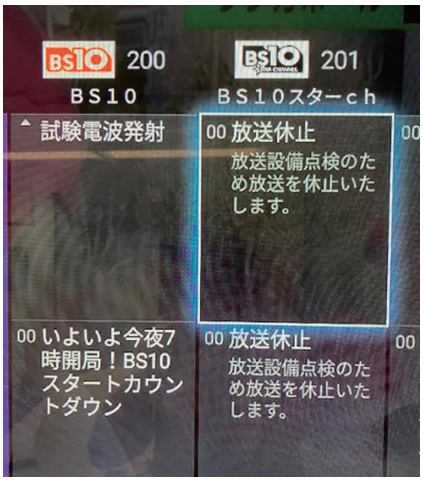


写真3　午前5時　切替に成功しEPGのチャンネル名が「BS10」「BS10スターチャンネル」に変更



写真4　2025年1月10日（金）8:55～
BS10スターチャンネルのオープニングID



写真5　19時～BS10開局特番スタート

7. 申請と技術的課題は全てクリアー

想定外のトラブルもあり、開局が危ぶまれた場面もあったが、無事に難関をクリアーした。



図7　BS10移行に向けた技術課題解消状況

8. 有料チャンネルの刷新：「BS10プレミアム」への進化

この統合・再編に伴い、既存の有料映画チャンネル「BS10スターチャンネル」はブランドイメージを一新し、「BS10プレミアム」に向けスタートを切ることとなる。開局40周年に向けた大型刷新として、チャンネル名を長年親しまれてきた「スターチャンネル」から2025年10月1日「BS10プレミアム」に変更。

「今日もいい映画、今日もいい音楽」を掲げ、従来の洋画、海外ドラマ中心の編成から、邦画やグループの強みを活かした独占音楽コンテンツ（ライブ生中継やオリジナル音楽番組）を取り入れたチャンネルへと生まれ変わった。



2025/1/10～9/30　　2025/10/1～
図8　BS10プレミアムへのロゴ変更

9. スカパーJSATへの送出設備の一本化：バックエンド基盤の構造改革と効率化

■送出マスター統合の必要性

放送局の運営において、映像・音声信号やデータ放送、電子番組表（EPG）などを電波として衛星へ打ち上げるための送出設備の維持・運用は極めて高額かつ継続的な運用費を必要とした。再編前の「BSJapanext」と「旧スターチャンネル」は、それぞれ異なる運用体制と別々の拠点から放送を送出していた。



図9　BS10・BS10プレミアムの送出状況

■技術的・運用的メリットと経済合理性

運用保守コストの劇的な削減、2拠点に分散していた24時間365日の運用監視ライン、回線維持費、保守要員を1つのプラットフォームへ一本化・集約することにより、重複していたインフラコストと人件費を大幅削減に繋げた。

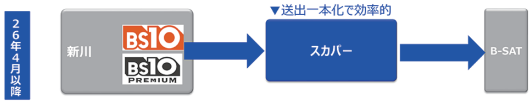


図10　BS10・BS10プレミアム送出設備一本化

■送出マスター移転における主要な技術的問題点

BS10プレミアムの送出機能をスカパーJSATに移行するにあたり、番組（MXF）ファイル及び営放システムの編成データ、プレイリストデータ、EPGデータ等の相互運用性が必要となる。

・営放システムのデータ（EPG/PSI/SI）とスカパーJSAT送出自動化（APC）のデータ連携

BS10側の営放システムから出力させるプレイリストデータと、BS10プレミアムで使用している営放システムとでは、スカパーJSAT側の自動番組制御システム（APC）とのインターフェースが非同期となり、連携させる必要があった。また、イベントID、素材ID、番組付属情報（データ放送、字幕情報）を遅延なくシームレスに同期・変換するインターフェースの構築が急務となった。

10. 自社CAS事業体（独自顧客管理）の廃止とスカパーJSAT事業体へのCAS統合

BS10プレミアム（旧スターチャンネル）が自社独自のCAS（限定受信）システムを廃止し、限定受信基盤（スカパーJSAT CAS事業体）のシステムへ移行・統合した背景には、主に運用コストの最適化とシステム運用の効率化がある。

・運用・維持コストの削減

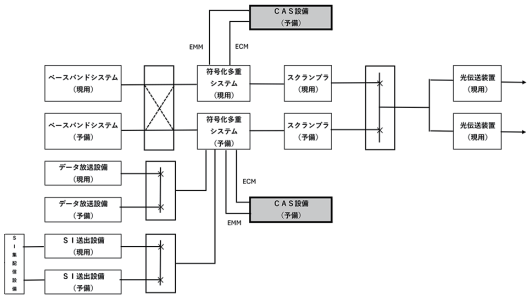
独自のCASシステムを保有・運用し続けるには、専用サーバや送出設備の保守、システムのセキュリティ更新、運用人員の確保など、継続的に大きな固定費が発生する。

共通のプラットフォーム（スカパーJSAT）の既存インフラへ集約することで、限定受信にかかるシステム維持コストを大幅削減できる。

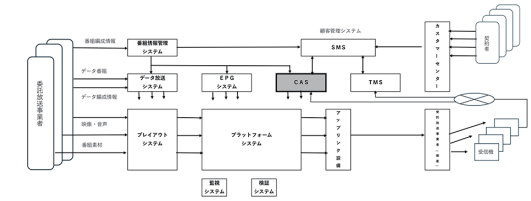
CAS基盤を統一・一本化することで、送出設備から制御までの構造がシンプルになり、管理負担の削減に繋がる。

・システムの安定性と障害対応力の向上

既に大規模かつ安定して稼働している共通インフラを活用することで、大規模障害へのリスク分散（冗長性の確保）や障害発生時の復旧対応を効率化できる。



（※1）図11　これまでBS10プレミアムは自社CAS設備を所有



（※1）図12　これからはスカパーJSAT プラットフォーム加入の有料放送事業者と同じスカパーJSATで所有するCAS事業体に加入する

・放送波による事前鍵更新の手配

既存加入者のテレビ画面が切替日当日に突然ブラッ

クアウト（契約案内画面化）するのを防ぐため、放送波上での事前鍵更新を行った。

ECM/EMMの重複多重化: 放送波（TSパケット）内に、従来の「自社CAS用鍵」と「スカパーJSAT CAS用鍵」を同時に多重化（デュアルCAS送出）して一定期間放送。既存加入者が日常的にテレビを視聴している間に、放送波経由で「スカパーJSAT CAS側でもこのカードを有効とする」ためのEMM(権利更新信号)を受信機（B-CAS/ACAS）にバックグラウンド書き込みを行った。

11. BS10プレミアムにおける「コールセンター直接受付」の刷新

ジャパネットブロードキャスティングが「BS10プレミアム」を推進するにあたり、従来の有料テレビ業界では異例となるコールセンターを通じた直接契約受付を導入。

・有料放送の加入ハードルを解消する「電話完結」モデル

従来、有料衛星放送の契約手続きは、Webサイトからの入力やプラットフォームを経由した書面・オンライン手続きが主流であり、シニア層を中心に「手続きが面倒・分かり難い」という離脱要因が存在していた。

BS10プレミアムでは、ジャパネットが長年通販事業で培ってきた電話窓口ノウハウを投入し、自社のコールセンターで視聴の加入・変更手続きが即座に完結する体制を整備した。

・カスタマーサポートとSMSシステムの連携

コールセンターで受電した新規加入・契約変更・解約データは、ジャパネットの自社顧客基盤からAPI等を介してスカパーJSATのSMS(顧客管理システム）に連携。これにより、電話終了後の数分でユーザーのB-CAS/ACASカードへ視聴解読鍵（EMM）が打刻される仕組みを構築。

・番組内で紹介した映画のプロモーションや通販商品、BS10プレミアムへのアップセル（加入誘導）を全てグループ内のコールセンターで受け止めることで、グループ内で高効率に回収・再投資するビジネスモデルの成立

「BS10プレミアム」におけるコールセンター戦略は、応答力・オペレーション力を背景に実現したもので、加入手続きのストレスを極限まで減らし「電話一本で完結する有料BS放送」を実現したことは、他の放送局には真似できないジャパネットグループならではの最大の強みとなっている。

12. BS10プレミアム営放システム刷新

BS10プレミアム（旧スターチャンネル）のスカパーJSAT託送移行に伴う営放システムの開発スケジュールは、2025年6月から2026年4月1日の切替当日までの約10ヶ月間という、極めてタイトな短期間で実行されたプロジェクトであった。

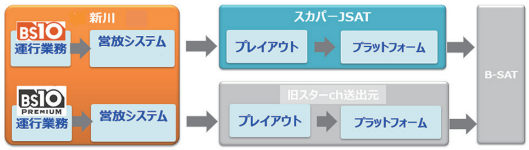


図13　現状の送出システムの構成



図14　2026年4月1日　目指すべき姿

●BS10プレミアム（旧スターチャンネル）における営放システムの開発・刷新は、チャンネルの再編・改称「無料・有料ハイブリッド運用」に対応するための極めて重要なバックオフィス側のシステム構築プロジェクトであった。

●営放システム開発の具体的な要件は、有料映画専門局から「無料BS10（200ch）と同居する有料チャンネル（201ch)」へと構造が変化したことで、従来の有料放送単独チャンネル向けの営放システムからの脱却、設計変更が必要。

■開発・改修における3つの主要モジュール

1. 無料・有料連携 EPG/営放枠管理モジュール

無料の「BS10」で放送する映画解説番組やドラマの無料放送から、有料の「BS10プレミアム」へ視聴者をシームレスに誘導するため、チャンネル(200ch/201ch）にまたがるデータ統合が可能なこと。

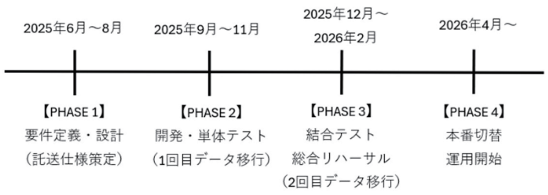
2. スカパーJSAT託送マスター連携(プレイリスト生成)

BS10プレミアムの営放システムから出力する送出データ形式をスカパーJSAT標準フォーマットへ完全準拠（インターフェース）させる必要があった。

営放システムで生成したプレイリストデータをスカパーJSATの自動番組制御システム（APC）が解釈できるデータ形式へリアルタイム変換・自動送信するモジュール開発。

3. 番宣素材ID(素材コード・素材メタデータ）の完全照合：スカパーJSAT側のMXFファイルインジェストサーバと営放側の素材IDを連携し、素材の未搬入・尺違い（Durationエラー）を未然に防ぐチェックロジックの実装。

表11　システム開発とロードマップと品質管理



■要件定義・データモデル設計（2025年夏）：
BS10プレミアム（旧スターチャンネル）の営放システムのデータと編成データをBS10とのデータ構造に統合・標準化させる。

■開発・単体テスト（2025年秋）：
スカパーJSATマスターの検証環境に対し、営放システムからプレイリストデータ、EPGデータを送信し、プレイアウトAPCシステムにおいて正常にデータ授受ができるかの確認。

■データ移行（データマイグレーション）
（2025年9月/2026年1月）
既存のBS10プレミアムの営放システムデータの過去の番組素材情報、編成情報、番組メタデータ情報を欠損なく次期BS10プレミアム営放システムに移行するExecuteを実施。



図15　既存営放から新設営放にデータ移行

■リハーサル・パララン運用（2026年3月～）：
現行の送出と並行して新営放システムを稼働させ、出力される送出データに差分やエラーがないかを「ホット・ホット」状態で検証。

13. 放送準備及び送出運用業務をスカパーJSATへの完全委託（託送化・アウトソーシングというバックエンドの大幅な構造改革）

ジャパネットブロードキャスティングのCM運行担当者を、業務委託先となるスカパーJSATに派遣。
2025年11月～2026年2月までの約2ケ月強に渡り、オペレーション訓練を開始､万全を期した対応を行う。

表12　CM運行チームのレクチャー工程

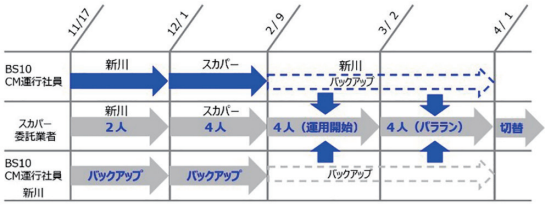


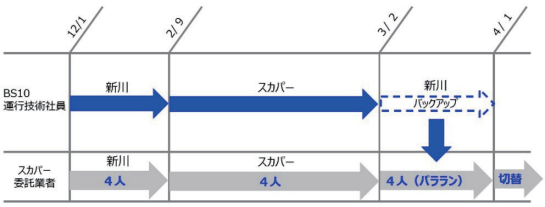




写真6
座学から丁寧に対応、全員が同じ習熟状態になるまで指導

2026年2月9日より、CM運行データのOAデータへの投入を開始。
本編運行チームも、現業の業務も行いながら、約2ケ月に渡るレクチャーを実施。2026年2月よりスカパーJSATへ派遣、レクチャーを開始した。
2026年3月2日より、本編のOAデータへの投入を開始。
これまでの放送準備業務範囲を大幅に刷新した。

表13　本編運行チームのレクチャー工程



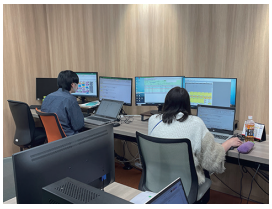


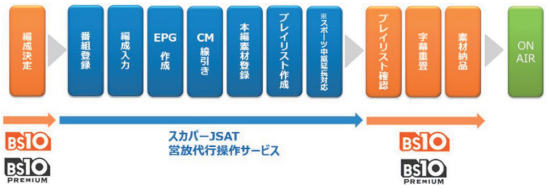


写真7
1対1の読み合せ確認や単独で操作ができるかのチェックを実施

表14　これまでの放送準備業務範囲



表15　スカパーJSATへの業務委託範囲



14. 800ch独立データ放送システムの検証

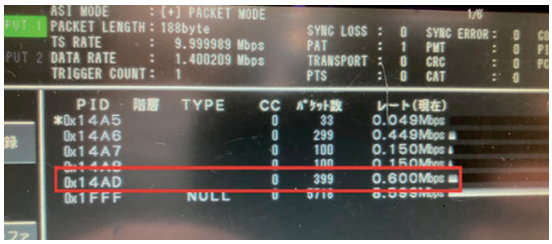


写真8　TSアナライザー計測結果
TS信号の多重化装置（MUX）入力前
PID：「14AD」がデータ放送／600Kbps

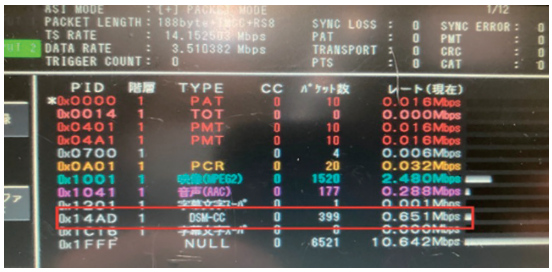


写真9　TSアナライザー計測結果
TS信号の多重化装置（MUX）出力
PID：「14AD」がデータ放送／600Kbps

15. 遂に最終章　送出設備一本化完了へ

2026年3月31日～4月1日、いよいよ切替当日を迎える。

＜やるべきこと＞

送出設備を旧スターch送出元からスカパーJSATに変更する。

CAS事業体をジャパネットブロードキャスティング事業体からスカパーJSAT事業体に移行する。

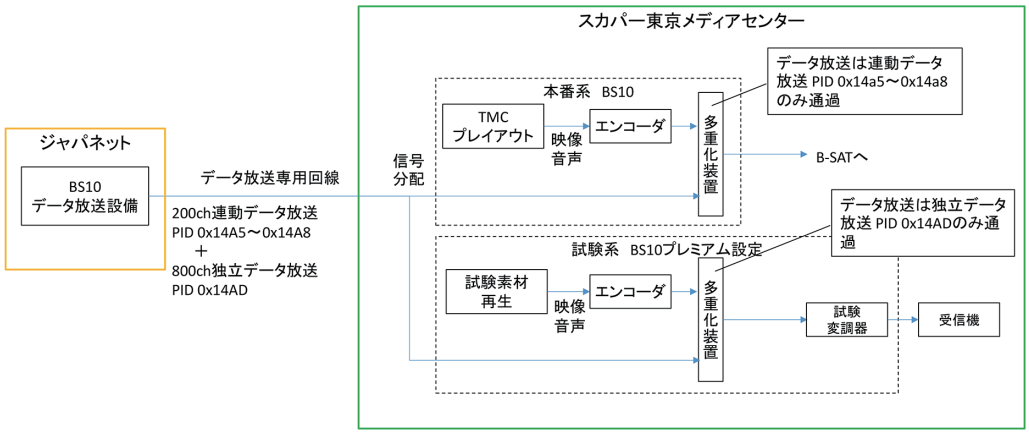


図16　BS10プレミアムの独立データ放送をBS10データ放送TSに多重する方式で伝送

BS10プレミアム契約者へのサービス影響を減らすために、移行日に先立って、スカパー事業体の鍵開けEMMの受信を誘導。

CA代替メッセージは変更なし。CA代替リンク先(BS800ch)の編成内容も変更は無し。

カスタマー対応はこれまで通り、BS10プレミアムカスタマーセンターで対応。

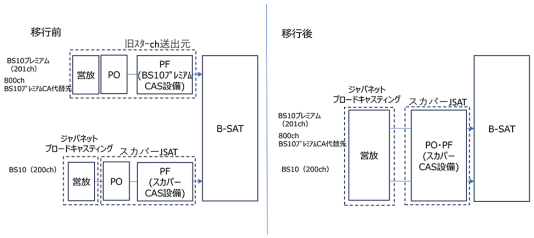


図17　送出設備・事業体移行の概要

表16　送出設備切替タイムスケジュール



■BS10プレミアム　送出設備切替作業概要

作業実施日：2026年4月1日（水）　0:00～07:00

2026年3月31日（火）24:00～31:00

休止対象ch：BS10　0:00～6:00

BS10プレミアム　0:05～6:55

■作業概要

BS10プレミアムのプレイアウト設備及びプラットフォームをスカパーJSAT設備に切り替える。

スカパーJSATに設置されているBS10 EPGサーバを全局SIセンターに接続し、EIT/BIT/SDTの集配信を開始。

旧スターch送出元に関して以下の作業を行う。

✓旧スターch送出元のEMMサーバとスカパーJSAT顧客管理システム間のインターフェース接続を断

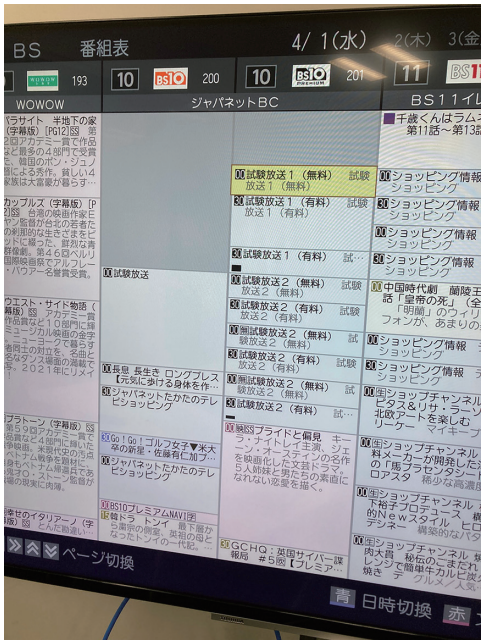


写真10　切替中のEPG情報

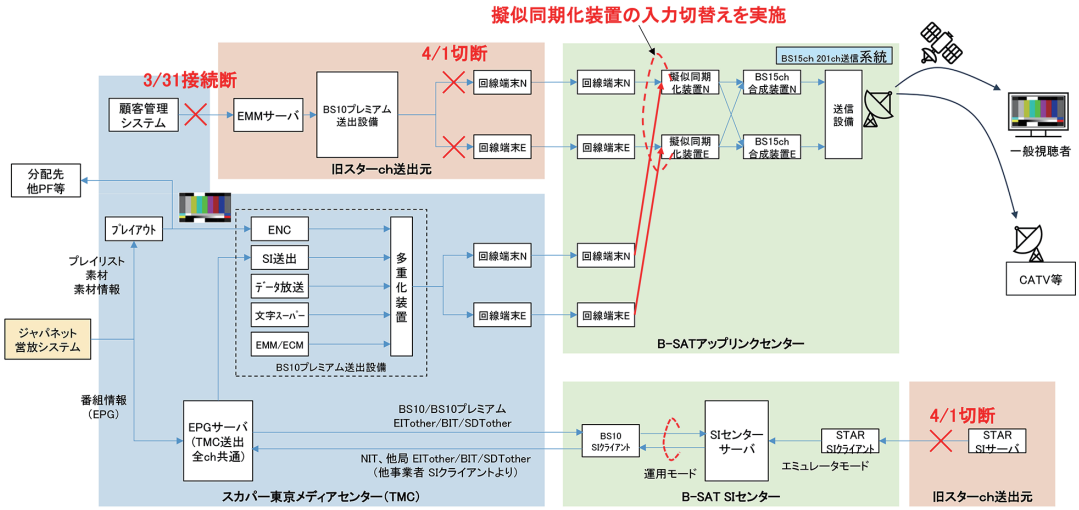


図18　送出設備切替系統図



写真11　BS10プレミアムノースクランブル試験放送

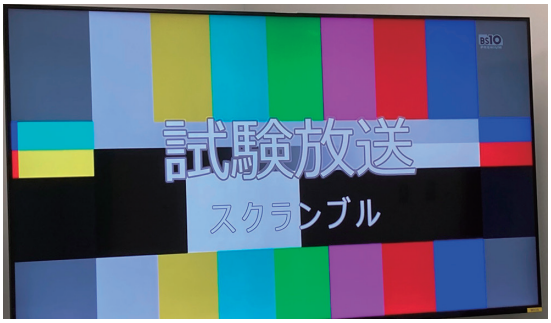


写真12　BS10プレミアムスクランブル試験放送

（顧客管理システム側で実施）。
✓BS10プレミアム TS回線端末入力断
✓BS10プレミアム SIクライアント L3SWの電源OFF（切断）
✓通報端末OFF

試験放送は、以下の目的で実施。
✓B-SAT設備及びスカパーJSATプラットフォーム設備の冗長系切替確認。
✓プレイアウト／プラットフォーム設備の運用パラメータ最終確認。
✓CATVの受信確認など。



写真13　切替完了後関係者の皆様と記念撮影

16. おわりに

BS10ch（BS200ch）へのチャンネル移行に続き、送出設備の一本化（一事業者に集約）を実施した。2024年度、2025年度2年連続で放送史上70年の歴史の中で「前例のない取り組み」に挑戦した。
✓帯域変更とBS10chへのチャンネル移行への挑戦。
✓上位システムと送出システムとの一本化に挑戦。
✓ミスをすると放送事故に直結する放送運行データ登録作業のアウトソーシングに挑戦。
結果として、
✓BS10視聴率UP
✓BS10プレミアムの固定費大幅削減
✓放送事故リスクの低減
を達成した。

今回の「挑戦」が衛星放送事業者の持続可能な高効率収益構造へとシフトするための先進的なケーススタディとなれば幸いである。

また、スカパーJSATへの放送準備業務委託は、単なる「作業の外部委託」に留まらない。

ジャパネットブロードキャスティングがコンテンツ制作・編成・マーケティングという「コアコンピタンス（番組価値の創出）」にリソースを集中させる一方、素材検品・メタデータ生成・送出といった「バックエンド（放送インフラ・オペレーション）」を信頼性の高いプラットフォーム事業者へ集約・可変費化した合理的な事業設計である。

最後に、本プロジェクトに多大なるご尽力を頂いた総務省様、スカパーJSAT株式会社様、株式会社東北新社様、株式会社シン・プラットプレイアウト様、株式会社放送衛星システム（B-SAT）様、一般社団法人電子情報技術産業協会（JEITA）デジタル放送専門委員会様、一般社団法人放送サービス高度化推進協会（A-PAB）様、株式会社ビーエス・コンディショナルアクセスシステムズ（B-CAS）様、一般社団法人新CAS協議会（ACAS）様、一般社団法人日本ケーブルテレビ連盟様、一般社団法人日本ケーブルラボ様、一般社団法人電波産業会（ARIB）様、株式会社ユニゾンシステムズ様、日本電気株式会社様、JCOM株式会社様、日本デジタル配信株式会社様、株式会社NHKテクノロジーズ様、営電株式会社様、日本放送協会（NHK）様、株式会社WOWOW様、各BS放送事業者様および関係各社の皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

（※1）デジタル放送ハンドブック、平成15年6月20日、社団法人映像情報メディア学会